

# いしづち

2026.3

MARCH

No.169

公益社団法人 愛媛県建築士会  
Ehime Society of Architects & Building Engineers  
<http://www.ehime-shikai.com>

AI = Architectural Intelligence  
自分磨きへの道しるべ 建築パース制作実践編5)  
城大工「坂本家」の足跡 (2)



1	A I = Architectural Intelligence	道上壯/V u A……①
2	自分磨きへの道しるべ 建築パス製作実践編5)	松山支部 尾崎 光高……③
3	城大工「坂本家」の足跡 ～2～	愛媛大学客員研究員 一級建築士 野本 健……⑤ 文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹……⑤
4	委員会報告	砥部焼の町 村の駅五本松 文化財・まちづくり委員会 委員 菅野 隆次……⑦ 愛媛の登録有形文化財 一柳陣屋門 文化財・まちづくり委員会 委員 大西 千里……⑩ 中四国まちづくり会議報告 文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和……⑪ 女性委員会主催見学会「岩松町並み散策」報告 女性委員会 委員 尾崎 千尋……⑫ サポートの会の活動について サポートの会 リーダー 寺尾 保仁……⑬
5	支部報告	令和7年度建築士の日活動報告 新居浜支部 伊藤 大樹……⑭
6	お知らせ	令和8年度「地域貢献活動基金助成対象事業」の募集について 事務局……⑮ 第4回理事会概要報告 事務局……⑯ ※1 (入会及び退会並びに会費に関する規程) ……⑰ ※2 (入会申込書・住所等の届出・退会届) ……⑰

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。

### 透明水彩・色鉛筆

#### 題：「家島・大煙突」 (愛媛県今治市宮窪町四阪島) 紙サイズ/F4

四阪島は、家島、美濃島、明神島、鼠島、梶島の5つの島々の総称です。  
現在は住友金属鉱山が所有する私有地となっており、一般の立ち入りは原則禁止されています。2013年に解体された大煙突は、家島の山頂付近にそびえ立っており、瀬戸内海を航行する船からも一目でそれと分かる地域のシンボルでした。現在は煙突そのものはなくなりましたが、家島には今も住友金属鉱山の工場施設が稼働しています。  
文化的価値にも非常に高く、世界最高水準の土木・建築技術で大正時代に建設された初代の大煙突は、当時としては驚異的なスペックを誇りました。東洋一の規模：高さ約64メートル(鉄筋コンクリート製)は、当時のアジアで最大級。100年近く瀬戸内の潮風に耐え抜いた建築構造そのものが、当時の日本の高度な土木技術を証明する資料でした。

#### 表紙作者 上田 勇一 プロフィール

1974 東京生まれ  
1980 小学校から高校まで松山在住  
1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞  
1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞(愛媛県建築士事務所協会主催)  
1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ  
1996 日本工業大学建築学科 卒業  
1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催  
2002 日本ファンタジーノベル賞受賞者「世界の果の庭」(新潮社)の装丁担当  
2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞(東京/日動画廊)  
2010 愛媛県美術館に作品「ドライフラワー」收藏される  
2015~17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載 絵画教室やオリジナルブランド額工房「櫛リチエルカ」を設立  
2017 「えひめの塗り絵」を出版  
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。  
現在、現代日本美術会 会員 / 審査員



AIが身近に普及してきた。建築に携わる僕たちは、AI = Architectural Intelligence (建築的知能) を考えてゆく必要がある。

サム・アルトマンによって開発されたOpenAIのChatGPTを起爆剤として、GoogleのGeminiその他のAIが続々と登場している。幅広く様々なことを扱うものから専門分野に特化したもののみを扱うものまで、まるで人のあり方と同じのように、知能の裾野を広げ深化を遂げている。

僕たちにとって必要なことは、建築的知能を進化・発展させてゆくための「<sup>いしずえ</sup>礎」をAIによって築いてもらうことだ。逆に最も危惧されることは、全てをAIに任せっきりで、人が考えなくなってしまうことだ。現在、建築に関わる分野でも手探り状態でありながらAIの普及・導入が急速に進もうとしている。

大手ハウスメーカーでは、年間1万棟を超える住宅を設計・施工している。そしてそれらの何十年にも渡るデータの蓄積がある。例えば、これらの自社データを全て学習させたAIをつくれれば、設計・施工は今までになく容易になる。AIを使った設計は、こんな感じになるかもしれない。

ネット上の地図で敷地を指定して「予算、階数、延べ面積、外観イメージ、家族構成、要求室、駐車駐輪台数、外構、その他」を入力すると、30秒程度で「平・立・断面図、外観パース、内観パース、仕上表、工程表、概算見積書」が3タイプ出てくる。もちろん法的規制はチェック済みで、3Dプリンターに繋がればリアルな模型もつくれることができる。

クライアントと打ち合わせをした担当者が、3タイプの中から最も可能性のある案に修正を加えて、プレゼン資料を作成する。もちろん修正もAIで行う。修正キーワードを入力して、気に入った内容になるまで何度かAIに問い掛ければいい。そしてこれらに掛かる時間は、わずか1日足らず。膨大なデータをAIにまとめることができた企業は、きっとこんな仕事の進め方をするに違いない。そして、そこには僕たちが今まで積み上げてきた建築という生業に、大きな光を当てながら深い影を落とすことにもなるだろう。

実際にもものづくりをする現場ではまだまだ人の手が必要で、そう簡単に人手の省力化はできない。それに対して営業・企画・設計の段階では、とても簡単に人手の省力化ができる。またシステムがあれば、アルゴリズムがあれば、建築士でなくても、専門家でなくても、設計等の業務を今までよりもハイレベルで行うことが可能になる。ひょっとしたら、10年20年実務を重ねた一級建築士よりも、建築に興味のあるAI使いの中学生の方が、いい建築をつくるかもしれない。

人よりもAIに重きが置かれることにもなるだろう。1万棟の建築を学習したAIよりも、100万棟の建築を学習したAIの方が、当然優れている。前者のAIは1万円で、後者のAIは100万円で、販売・サブスクされるかもしれない。どのツールを手にするかといった競争が巻き起こるだろう。今までのCADの扱いとは全く違った優劣が生み出されてくることになる。

AIの進化発展は、ロードレースにとっても似ている。僕の好きなMotoGP(二輪ロードレースの最高峰カテゴリー)では、ライダーとバイクメーカーが最高時速360km/hを超えるモンスターマシンで競っている。ライダーだけがレース結果を決めるのではなく、またメーカーのマシンだけがレース結果を決めるわけではない。その両者が相まって、両者のバランスがレースの結果に繋がっている。

MotoGPのマシンに乗れば、誰でも早く走れるわけではない。スロットル、ブレーキ、全身を使ったハンドリング、コースのライン取り、コーナーリング時のハングオン、前後輪ドリフトのコントロール、タイヤマネジメント、その他、同じマシンでもライダーによってタイムは異なってくる。ライダーとマシンのマッチングや、ライダーのマシンの操り方が、タイムに直結してくる。

AI自体の性能も大切だが、そのAIをどう使うかが最終的にはポイントになってくる。同じAIでも、使い方によってアウトプットされてくる結果は、様々に異なってくる。ひょっとすると、1万円のAIで100万円のAIを凌ぐ結果を紡ぎ出すことができるかもしれない。圧倒的なマシンの差を、ライディングによってひっくり返す下剋上を巻き起こすことも可能かもしれない。

これから僕たちは好むと好まざるとに関わらず、AIと共生しなければならない時代に突入する。僕が考えていることは、概ね外れるだろう。なぜなら、事はそう単純なことではなく、そして、時代はいつも人の考えを遥かに超える歩み方をするものだからだ。そうであったとしても、考えることを放棄するのは懸命な策ではない。現時点で想定できることを考えておいて、目の前の変化に応じてその都度、見極める方向を修正してゆけばよいのだ。ただその為には、僕らはあらかじめ大きくブレることのないArchitectural Intelligence(建築的知能)を身に備えておく必要がある。

AIは、過去と現在の総体だ。そこからは、先人の英知が窺い知れる。優れた知恵や深い洞察力には、物事の道理を見抜き、真理を理解する知性が潜んでいる。ただ、建築の未来に対しては古めかしくて力不足で、僕たち生身の人間が抱く希望や可能性の方が有力な手掛かりとなる。つまり、営業・企画・設計・施工・積算・行政・調査・鑑定・維持管理・改修・その他…建築のどのジャンルでも、僕たち一人一人がプロフェッショナルとして、AI = Architectural Intelligence(建築的知能)を高めてゆくことが必要なのだ。

# 建築パース制作実践編 5)

## 水彩絵の具によるパース技法



アナログ時代の代表的な技法です。色彩感覚も養え、建物の性格表現、素材感の会得にも重要な要素となりますので是非取り入れてみて下さい。

### 1 使用道具類

水彩用絵の具、筆（面相筆・丸筆・平筆）溝引き定規、溝引き専用ガラス棒（又は筆の柄にて代用）〔直線を引くのに使います〕用紙は一般画用紙、コットン紙、キャンソン紙、ケント紙等があります。ケント紙（純白色）は慣れないと使いづらいです。用紙の色ですが、純白色は色の付け具合が難しいのと完成後の白い余白が強い為、主役建物が引き立ちにくくなります。よって、最初は薄いグレー系かアイボリー系の用紙で練習するのが良いと思います。絵画でも白い余白は残していない場合が殆どですね。描き始めた頃はグレーのキャンソン紙を使っていました。



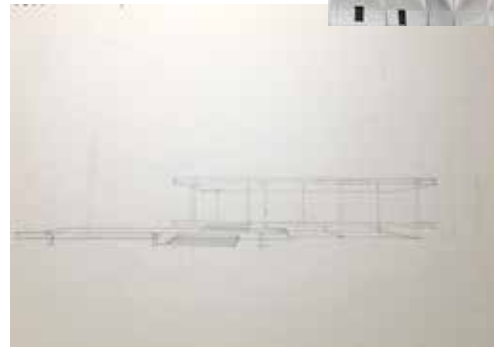
▲ 溝引き定規、各種筆



水彩絵の具▶  
(24色セット)

### 2 製作準備 以前ご紹介したファンズワース邸外観

これは写真を見て比率を考えながら直接画用紙に下書きをしましたが、何時ものように写真コピーを基に下図を転写するのが良いと思います。



◀ 作画手順 1

### 作画手順 1

①下図は参考写真にてシカゴ郊外の自然豊かな敷地に建つ環境を表現する為、全体のバランスを考えながらこれ位でまとめます〔シャープペンシルにて〕

### 作画手順 2

①着色前に水で用紙を大きな平筆にて濡らすとグラデーション効果を容易に表現出来ます。(色同士のぼやかし等) ②空を薄く描く。③地面を薄く描く。④樹木を薄く描く。⑤建物の下部の影も描く。(全体的に色の変化を意識しながらも大まかに色彩を変える)〔丸筆にて〕



◀ 作画手順 2

### 作画手順 3

①樹木の葉も様々な色の変化を意識して描いていく。②木の幹、枝も大まかに描き入れる。③影の部分も濃くして建物の浮き上り感を強調する。④芝生面も単調にならないように色分けにて変化を付ける。〔丸筆・平筆にて〕



◀ 作画手順 3

## 作画手順 4

まだ、周囲は完成では在りませんが、ここから建物に入ります。大体どんな建物もこの順番にて仕上げていきます。①まず窓の表現ですが、室内部分を余り細かくなならないように雰囲気が出せる程度に描き込む。②窓ガラスの反射を入れて透明感等を出す。(本当は左斜めから太陽光の設定ですが、イメージ上逆としました。右斜めの方が目線が横に流れず止まると判断しました) ③外壁部分・天井描き入れ後柱等の影の部分で大まかに描き分ける。(今回は一点透視図ですので消失点に向かう側面が影となります) ④前のテラス部分、階段部分の描き入れ。



## 作画手順 5

①外壁・柱・テラス・階段をクッキリと描きこみ。②消失点に向かっての影が付いている側面等を意識して仕上げる。③芝生面であるが白線にて仮に垂線を入れる。④屋根部分の左右に白い横線を入れる。(より建物形状を強調させる、見た目の変化を出す為等のテクニックです) {面相筆・平筆にて}



## 作画手順 6

又、周囲の描き込みを建物より強くなならないように気を付けながら仕上げていきます。①樹木の幹、枝等を描き足していく。②背後の樹木部を建物に接する所を少し濃いめにして主役が浮き出て来るように調整していく。③手前の樹木を濃い目にし、又、芝生面の影も強くして遠近感(空気遠近法)を強調していく。④芝生が生えているように描き込む。(丸筆・平筆にて)



## 作画手順 7

最終調整にて全体のバランスを再度確認しながら仕上げます。①室内の照明を強調する。②窓部分の消失点近くに赤色のマークを入れる。(これは私の手法ですが絵画等でも使われています) ③芝生面に赤系の色を足す。{緑と赤が補色(お互いが主張しあう色)ですので変化を更に強調さす為、直感的に入れました} ④芝生面影範囲の調整。



### プチ考察

この週末住宅は鉄骨造であり、洪水に見舞われる敷地の為高床式が採用されたようです。大自然の中に建つシンプルなデザインの建物ですが違和感なく存在していますね。現代に於いては、省エネ的な観点からは色々問題が出て来そうですが、その時代に生まれた建築を現代の目線で見るとは無理がありそうです。先ずはその思想を学ぶべきかもしれません。次回は、ちょっと逸れますが様々なセンスは生まれつきなものかについて私なりの考えをお伝えしたいと思います。設計・施工等の実務に於いても、大事な要素ですね。尚、建築士会HPより、カラー版が閲覧出来ますので宜しくお願い致します。

# 城大工「坂本家」の足跡 ～2～

執筆：愛媛大学客員研究員 一級建築士 野本 健  
監修：文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹



▲ 神の湯本館

## ■謝辞

柚山 俊夫様

【伊予史談会 会長】

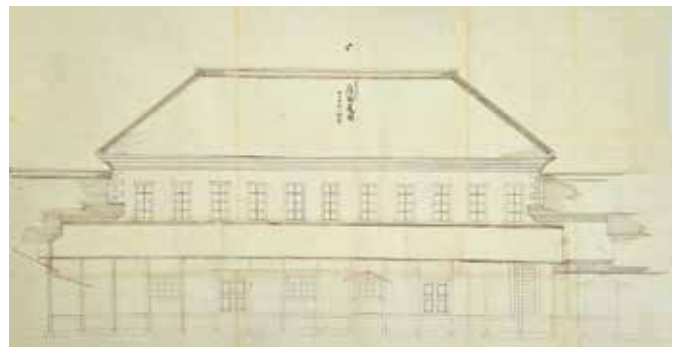
～古文書の提供及び助言

## ■ことわり

以下記載内容は、現時点において収集できた文献から総合的に判断した内容を記載している。そのため、調査状況により新たな知見が得られた場合、記載内容に訂正の必要が生じる可能性はある。

## ■はじめに

『道後温泉本館保存修理工事 総集編』および愛媛県建築士会誌『いしづち』において、松山城や道後温泉本館の建築に関わった坂本家について執筆させていただいた。その後、古資料を整理する中で新たに2つの発見があったため、報告したい。



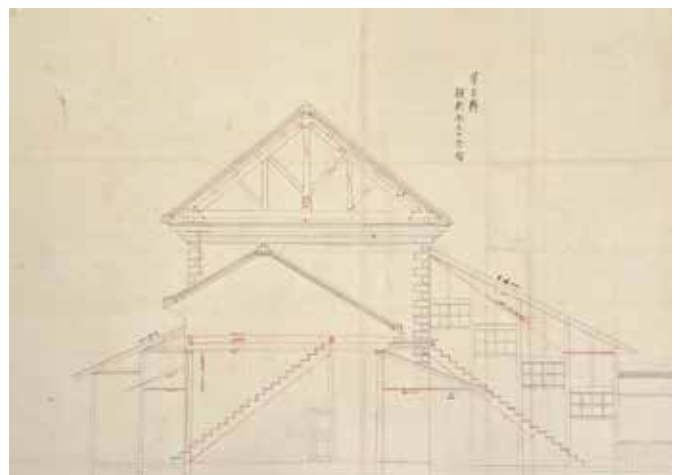
▲ 愛媛県庁収税室 立面図

## ①道後温泉本館の神の湯本館の洋小屋について

道後温泉本館を長年にわたり研究された河合勤氏は、『伊予史談』および『道後温泉 増補版』において次のように記している。

「道後温泉神の湯本館（三層楼）は、外観こそ純和風であるが、構造的には小屋組にトラス（合掌組）を採用し、西欧技術指向が見られることはすでに指摘されていた。しかし、松山藩の城郭建築棟梁であった坂本又八郎が、明治維新以降、いかなる経路でこの技術を会得したかについては、これを明らかにする史料に出会うことがなかった。」

河合氏はその手がかりを求め、愛媛県下でトラス構



▲ 愛媛県庁収税室 断面図

## 城大工「坂本家」の足跡 ～2～

造をもつ建築として知られる愛媛県師範学校本館に着目した。そして、当時、公共建築の近代化に尽力していた愛媛県知事・藤村紫朗に注目し、藤村が山梨県知事時代に関わった擬洋風建築に通じた大工・小宮山弥太郎との関係を探った。しかし、坂本又八郎との直接的な繋がりを示す史料は見つけられなかった。

今回、私は新史料として「愛媛県庁収税室増築工事」に関する資料を入手した。この史料によれば、明治21年(1888)4月、坂本又八郎が同工事の入札に参加していることが確認できる。注目すべきは、その断面図には洋小屋構造が描かれている点である。

この入札を通じて坂本又八郎は洋小屋の技術について見聞し、その後、道後温泉本館の神の湯本館において応用したと推察される。

河合氏は自身の論考を「調査継続中ではあるが、広く指導を仰ぎ得ることを期待し、報告することにした」と締めくくり、さらに「以上、調査途次の中間報告とも申すべき発表となったが、これは愛媛県師範学校落成の後の小宮山弥太郎の足跡などについて、隠れた資料があれば御教示賜りたい一念からであった」と述べている。

つまり、彼は小屋組技術の伝来を解明できない無念さを残して筆を擱いたのである。

今回、新史料によってその河合氏の探究を補完し、未解明であった技術伝承の経路を明らかにできたことは、愛媛県の建築史においてきわめて意義深い成果といえる。

### ②招魂社について

道後温泉本館の神の湯本館や又新殿・霊の湯棟を手掛けたことで知られる城大工・坂本家。その坂本又八郎が、多賀神社の東隣にある初代の「招魂社」の建設にも携わっていたことが、今回の調査で新たに判明した。

この招魂社は、のちの愛媛県護国神社にあたるもので、明治以降、全国各地で戦没者を慰霊するために建てられた神社の一つである。愛媛県では明治29年8月22日に設立が認可され、明治32年4月16日に落成式が行われた。

道後温泉の史料によると、明治29年当時、熊本県山鹿温泉の今井喜源太が坂本又八郎を棟梁として招きたい旨の手紙を道後温泉に送っている。これに対し、道

後温泉側からは「坂本又八郎は現在、招魂社の建築で多忙のため、行けるとしても11月頃になりそうだ」との返書が送られており、この時期に彼が招魂社の建設に従事していたことが確認できる。また、多賀神社の宮司によれば、「道後温泉の宮大工が招魂社を手掛けた」との口伝も残されている。

現在、この建物は「さくら幼稚園」として利用されている。「さくら」の名は、かつて招魂社で用いられていた社紋の“桜”に由来し、現在、愛媛県護国神社の社紋として受け継がれている。多賀神社から現在地(護国神社)へ御霊を移す際には、松山市内を消灯させ、目的地まで白布を敷いて「御霊遷し(遷座)」が行われたと伝えられている。

現存する招魂社建築の特徴として、床が低い点が挙げられる。これは「軍人が出入りしやすいように設計された」と伝えられている。また、現在は銅板葺きだが、当初は瓦葺きであった。阪神淡路大震災の際、幼稚園児の安全を考慮して銅板に葺き替えられたという。



▲招魂社(現さくら幼稚園)

今も子どもたちの笑顔があふれるこの建物には、坂本又八郎の技と精神が息づいている。道後温泉本館と並び、坂本家の足跡を感じられる貴重な建築として、ぜひ一度ご覧いただきたい。

道後温泉本館の保存修理工事やその歴史については、『道後温泉本館保存修理工事 総集編』や『道後温泉湯釜ものがたり』に詳しくまとめている。ご興味のある方は、ぜひお手に取ってご覧いただければ幸いである。

\*本書掲載の文章・図版の無断複製・転載を禁じます。

～1～は2023年9月号に掲載

# 砥部焼の町 村の駅五本松

文化財・まちづくり委員会 委員 菅野 隆次

砥部焼の歴史をふりかえってみると、1775年当時は、藩政時代大洲藩に属していました。

当時、大洲藩は、干ばつによる農作物の不作や江戸藩邸の火災などで、経済的に行き詰まっていた。

そこで、砥部町北川毛村、大南村では、陶器を製作していることから、御用商人の情報で、天草で砥石くずから磁器を作っていると聞き、大洲藩主加藤泰侯は、磁器を製作するよう命じました。

かつて砥部の外山という地域では、良質の砥石の採掘が盛んでしたので、今でいう廃棄物からの新しい産業を興したのです。上麻生村・組頭 杉野丈助が五本松にのぼり窯を作り、肥前から陶工を招いて磁器づくりを始めました。この時の窯を上原窯といいます。何度かの試し焼きの後、焼きあがった製品は、失敗をしました。

何度も失敗を重ねるうちにある陶工から筑前の上薬を進められ、ついに1777年12月10日砥部に磁器が誕生いたしました。砥部町大南村の陶祖ヶ丘には、陶工杉野丈助をたたえる記念碑があります。以上は、「砥部町のホームページ」から抜粋。

こうした砥部焼に関する情報を「より多くの人々に親しんでもらいたい」との思いから、空き家だった古民家を利用して2010年の秋にオープンした、「村の駅 五本松」という周囲の緑と調和した、風情が香る藁葺屋根の接待所があります。町内の窯元が製作した、砥部焼のそば猪口を展示販売しています。また、砥部町の多くの窯元の案内書としても利用されています。様々なイベントも開催され、地元住民との触れ合いの場としても利用されています。



▲ 村の駅 五本松

この建物は、古民家と称される施設で、百年以上は経っている木造平屋のこじんまりとした構えであります。

藁葺の屋根は、かなり傷みがひどく、耐用年数から言ってもそろそろ葺き替えをしておかないと益々傷みが増えるのではないかと危惧されます。今回はこの施設を調査することにいたしました。



▲ 内部の様子

砥部町は、町の産業としてではなく愛媛県の名産として砥部焼を大切にしており、それを伝承するために多くの施設を建てています。ところがこの調査をした後、突然産地の砥石の採掘が、困難になるという報道があり砥部焼の継承継続が危ぶまれている事態であることが判明いたしました。地域を代表する、こうした産業の維持と活性化のためには、これらの課題を解決していくための取り組みが重要です。幸い組合同志の結束で、当面の危機は免れたようですが、今こそ砥部焼の文化継承のため県民が一緒になって行動を起こすことが求められます。

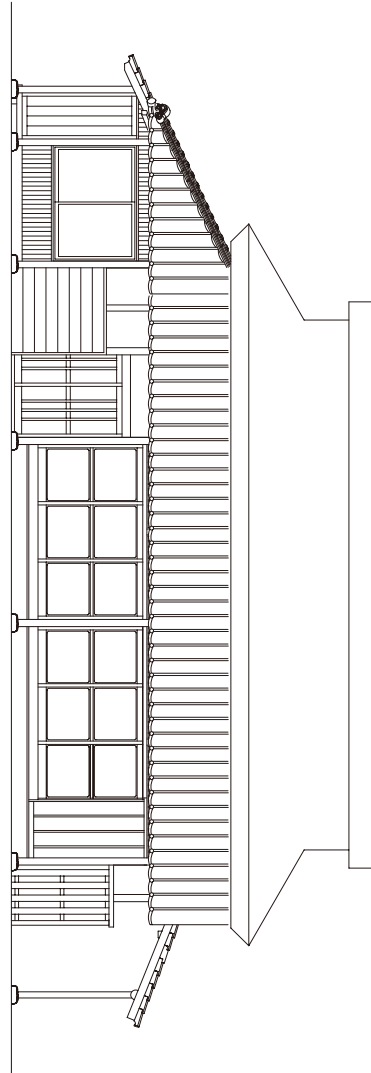
我々の活動、およびこの記録が、少しでも地元の方々の役に立つことができれば幸いです。



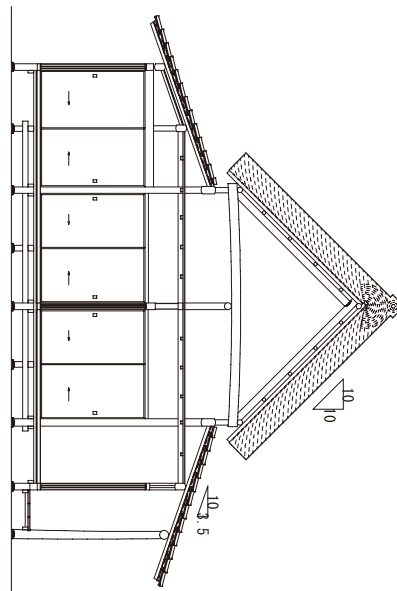
▲ 調査を終えて



立面图



断面图



# 愛媛の登録有形文化財 一柳陣屋門

ひとつやなぎじんやもん

4

委員会報告

文化財・まちづくり委員会 委員 大西 千里

## 【概要】

一柳陣屋門は2000年9月26日に国の登録有形文化財に指定された。

登録有形文化財のプレートの隣に「この建物は『旧川之江藩一柳陣屋門』の遺構である。江戸初期の乳児門様式を知る上からも極めて貴重で、末永く後世に伝えるものとして、この度文化庁より登録有形文化財に指定された」と記されている。

この陣屋門は一柳直家公が川之江藩の藩主となっていた寛永13年(1636)から寛永19年(1642)の間、新町にあった陣屋の表門である。

直家公は城山山上に城を再建しようと夢見ていたが、寛永の飢饉などで時期が悪く、志を得ないうちに急病にかかって、江戸で亡くなった。跡継ぎがないため川之江藩は取り潰しとなり断絶、養子直次は播州小野に移っていった。

記録ではその時、陣屋にあった表門を宝積寺(現川之江八幡神社)に賜うとある。この門は松山城築城の際に用いられている慶長尺(1間=6尺5寸)を使って建てられており、江戸初期の建物であることは間違いない。



▲一柳陣屋門

## 【外観】

建物は、入母屋造、総2階建て、1階左を門構え、右を詰所とし、2階は2室に分ける。地方の小藩における陣屋建築の一端を示すものである。老朽化が激しかったが、平成11年、全面解体修理を行い復元された。

全国的に見ても陣屋門が残っている例は少なく、特に



▲登録有形文化財を示すプレートと石碑

二階建ての陣屋門はここにしかない貴重なものである。

一柳陣屋の広さは約33,000平方メートル以上の広さを誇り、東は栄町通り、西は新町和田医院あたり、南はフジ川之江店、北は吉祥院あたりまでを含む規模であった。

栄町のアーケードから200mほどのところにある栄町集会所の脇に一柳直家公陣屋跡の石碑が建てられており、この辺り一帯が陣屋跡であるが、商店街と住宅地で、陣屋の遺構などは何も残っていない。



▲陣屋跡を示す石碑

## 【最後に】

陣屋はわずか6年で消えたうえ、現在では跡地が市街化されて遺構が全く残されていない。唯一の建物遺構として現存する移築門は珍しい二階建てで、櫓門のような形をしているのが特徴的である。これだけでも見応えはあると思われる。

# 中四国まちづくり会議報告

令和7年11月29日・30日に岡山で行われた中四国まちづくり会議に参加した。29日のまち歩きは所用のため参加できなかったが、翌日朝早くの「特急いしづち」に乗り、30日の会議には参加することができた。



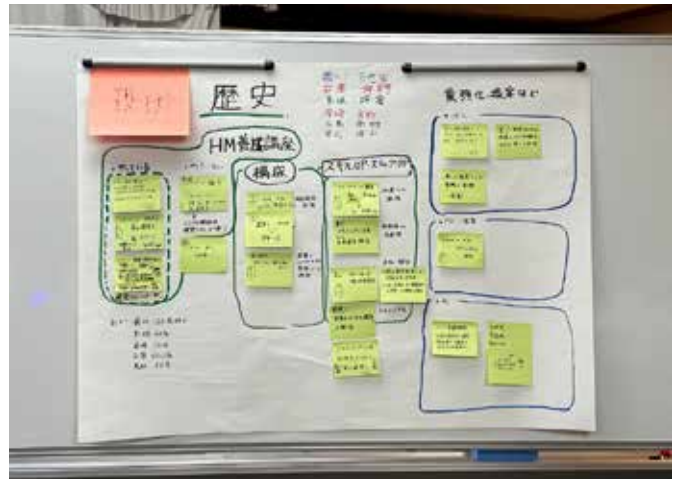
▲会場となった岡山国際交流センター

それまで「委員長会議」として長らく行われていたが、委員長だけでなく、まちづくり委員にも参加してもらいたいという思いから「まちづくり会議」となった。今回は兵庫県の方をオブザーバーに呼び、近畿ブロックの活動などの説明を聞き、そのまま会議にも参加していただいた。中四国と違い、部会ごとの会合や年に数回集まるなど、すぐに集まれる環境をうらやましく感じた。

恒例の会議であれば各県の活動報告があるのだが、今回はそれはなく部会ごとに班分けを行い、グループワーク後発表という形であった。部会内での情報共有やコミュニケーションを狙ったものと思われるが、自分としては各県の状況が知れるいい機会であったので、少し残念に感じた。ワークショップでは各部会における現状と課題について話し合いを持った。参加した歴史まちづくり部会では土会のまちづくりとして大きく参加はしてなく、基本的には部会活動はヘリテージマネージャーという事になり、そのなかでどのような構成なのか、独立しているのか、講座の内容はどうかといった話があった。愛媛県ではHM協議会があり、現在77名が登録されている(土会HPから確認できます)。本家本元の兵庫県は600名と多いが、香川県が120名と多いのには驚いた。香川県は登録有形文化財が497件と愛媛県の2.5倍以上と文化財

文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和

に対する意識も高く、それがHMの人数にも関係しているのかもしれない。



▲歴史部会の「現状」



▲歴史部会の「課題」

課題については市民とHMをつなぐものとして技術面や金銭面など私たちが直面している問題が意見として多く出された。知識をしっかりと持ち、所有者へフォローできるよう様々な角度の見方が必要になる。その知識と両輪であるのが技術であり、HM全体の底上げが必要であるとの認識が持たれた。景観部会では課題は単独の部会にとどまらず、他の部会と共通の問題が多くあるという意見も出た。一時的な補助金や助成金に頼らない活動方法を考えていくことも重要であるという意見も出た。

今回の会議は昼食後も話し合われ、長い時間の中で積極的な意見交換ができたと思う。今後は「まちづくり委員」にとどまらず、少しでも多くの人に参加してもらえようような「まちづくり会議」になることに期待したい。

# 女性委員会主催見学会 「岩松町並み散策」報告

女性委員会 委員 尾崎 千尋

開催日：令和7年11月29日(土)

見学場所：宇和島市岩松地区

参加者：14人

天気に恵まれた11月末、女性委員会の南予見学会で宇和島市津島町岩松の町並み散策に行ってきました。岩松地区は2023年に「重要伝統的建造物群保存地区」として登録されたばかりの地区です。私の住む愛南町から近い地域ですが、個人的に散策してもなかなか知ることの出来ない昔話や情報を大塚志織さんにガイドをして頂きながら、とても有意義に見て回ることが出来ました。



▲小西本家離れの蔵

明治時代の梁と改修された時に配置された新しい梁を組んだ様子も素敵でした。一部は小さなステージとなっていて、イベント時にはここで演奏会も催されています。自分の町にもこのようなスペースがあったらいいなと思いました。



▲色ガラスの窓

小西本家離れにある色ガラスは現在は色の付いたアクリル板になっていますが、オリジナルの色ガラスは別の場所に保管されています。地域のお祭りやイベントの際にオリジナルに替えられるようで、5月にまたお目見えするそうです。

色ガラスの赤色は金を使って作るとの事。どのくらい入るのかは知りませんが、財力あったんだなあと思える窓です。

岩松地区といえば大きな川、それがシンボルにもなっています。川沿いの家や旅館はやはりその景色も取り入れる設計になっています。

川の向かい側は国道で、私もこの川沿いの国道は良く通っているのですが、実はその川は、昔は別の位置に流れていて、船での郵送の利便性の為に人工的に造り替えたのだとか。

ガイドさんから聞いたときはびっくり、昔ってなんでもありやなど少し思いました(笑)。でもおかげで現在、川と町並みの風景や歴史が残っているんだなと納得もしました。

この位置関係になったおかげで商売も上手くいき町も栄え、作家の獅子文六さんもここに来ることになって「てんやわんや」という名作も生まれたそうです。



▲蔵の前で記念撮影

小西家、西村酒造、ハルモニの家、大畑旅館等々、沢山の建物を見学させていただきました。また地元のNASOや甘酒の試飲、岩松の飲食店の美味しいお弁当を食し、岩松にどっぷりと浸かった一日となりました。

損傷の大きい建物や、色んな事情で手をつけられない建物をなんとか維持しようとしていて、重伝建としてまだまだこれからなんだと思う場所も沢山ありましたが、ガイドしてくれた大塚さんや岩松地区に住んでいる方にお会いして、温かい人柄や、歴史を守りたい楽しみたいという想いも感じることができ、これからの岩松がどのようになっているのか、私も楽しみになった見学会でした。

# サポートの会の活動について

サポートの会 リーダー 寺尾 保仁

## 【目的】

令和5年3月23日の令和4年度第8回理事会にて（仮称）事業・会員増強支援のタスクフォースの設立について（現在のサポートの会）協議が始まりました。

一時期2,000名近くいた会員も現在1,400名近くまでに減少し、今後の活動・運営を考えると会員増強は急務ですが、会員増強としての事業を行うのも限度があります。

まずは、人手の不足している委員会活動をサポートすることで活性化を図り、しいては会員増強に結び付けることを目的として立ち上げました。サポートの会は任意の会となる為ボランティアとなり、無償となります。

今後は、会員増強になる活動等アイデアを出しながら本会へ提案、サポートしていきたいと思っています。

## 【会員の動向】

	H8.3月	H18.3月	H28.3月	R8.1月
正会員	1,975	1,598	1,448	1,157
準会員	156	54	115	234
合計	2,131	1,652	1,563	1,391
増減	-	-479	-89	-172

※平成6年開催の全国大会（えひめ大会）をピークに減少  
 ※平成14年より建築士会CPD制度が始まり会員の減少が緩やかに。

## 【R8年1月現在 会員の年代別】

年代	人数	比率
20、30代	83	7%
40、50代	447	39%
60～65歳	124	11%
66歳以上	503	43%

## 【組織】

主に各委員会のOB、各委員会に属しない会員、また、この支援に賛同していただく会員で構成。現在は8人所属。

今後は、数名の世話役を置き、地区毎でのサポートができるようメンバーを募る。

## 【活動内容】

- ・委員会で人手不足時のサポート
- ・会員の増強、会の活性化、会員の為のサービス向上等についてのアイデア及び提案
- ・メンバーの交流会（懇親会）
- ・独自企画（勉強会・交流会）の開催
- ・全国シニアクラブとの交流 他

## 【入会方法】

サポートの会への入会条件は特にありません。ただし任意の会ですので、あくまでもボランティアとなります。

## 建築士会事務局へ

タイトル：サポートの会入会申込みとし、

- ①氏名
- ②携帯電話番号
- ③連絡先メールアドレスを建築士会へ（lee04603@nifty.ne.jp）メールしてください。

## 『令和8年度の計画』

- ・登録者を増やす。
- ・会合を開き、今後の活動について意見・アイデア・地域の世話役の決定等組織を作っていく。
- ・各委員会事業のサポートを行っていく。

いしづち1月号にも書きましたが、これまで時間が取れなかったが、時間が取れるようになった方、交流会に参加したいと思う方、委員会のお手伝いをしていただけるとぜひ一緒に活動しませんか。

沢山の方のお申込みをお待ちしております。

# 令和7年度建築士の日活動報告

新居浜支部 伊藤 大樹

第一部 10月26日(土)

第二部 11月28日(金)

## 第一部

2025年10月26日 建築士会新居浜支部では、地域の皆さまに建築の魅力と専門性を知っていただく機会として、下記の2つの企画を実施いたしました。

### ①『ダ・ヴィンチの橋を渡ろう! 作ろう!』

ダヴィンチの橋とは、摩擦と重力を利用したシンプルな構造で、高い強度を持ちながらも釘や接着剤を使用せずに組み立てることができます。

今回、木材のみを組み合わせて「ダヴィンチの橋」を作成し、ワークショップを行いました。

子供から大人まで多くの方に参加いただき、完成した橋を実際に渡る体験も行い、参加者からは「構造や仕組みが良く分かった」「家族で楽しめた」などの声が寄せられ、大変好評でした。



▲組み合わせたダ・ヴィンチの橋

### ②『建築相談コーナー』

住まいに関する様々な相談を受け、特に耐震改修や断熱改修についての関心が高く、多くの質問をいただきました。相談者の状況に合わせて制度や工事のポイントなどをお伝えし、適切なアドバイスを行いました。

この活動を通じて、地域の方々には建築士の役割や専門知識を身近に感じていただく良い機会となりました。



▲建築相談コーナー

## 第二部

2025年11月28日 大阪・関西万博の「大屋根リング」に使われる予定だったCLT木材を、本会メンバーで手を加えベンチへと加工し、JR新居浜駅前広場へ設置いたしました。

リングの木材は複数社に発注され、本会新居浜支部の賛助会員様である「三王ハウジング」は約600本の柱材を加工しました。

「世界最大の木造建築物」としてギネス世界記録に認定され、脚光を浴びたリング。余った木材を利用し、建築の魅力伝える看板と共に、市民が一休みするベンチを設置いたしました。

この活動は愛媛新聞にも取り上げられました。



▲大屋根リングで作ったベンチ

## 令和8年度「地域貢献活動基金助成対象事業」の募集について 〔建築士会は、まちづくり活動を支援します。〕

公益社団法人愛媛県建築士会は、会員の皆さんが地域の人々と共に行う社会貢献事業や建築士会の内部組織（研究会等）が実施する地域貢献活動としての事業を応援します。

すでに活動をしている方も、これから何か始めようという方も、一定の条件を満たせば事業に助成金を活用することができます。

### 1. 助成の対象事業の内容

会員が参画する以下のテーマに沿った営利を目的としない地域貢献活動が対象です。

- (1) 地域のまちづくり
- (2) 景観の保全
- (3) 居住環境の保全・整備
- (4) 自然環境の保全・整備
- (5) 福祉環境の整備
- (6) 地域住宅づくり
- (7) 地域防災づくり
- (8) 歴史的遺産の再生と活用
- (9) その他、地域活性化、社会サービス

### 2. 助成の対象

- ・建築士会会員が参画する地域貢献活動に対する活動助成
- ・国、地方公共団体から、建築士会に対しての委託事業、人材派遣に関連して進められる地域貢献活動に対する活動助成
- ・地域貢献団体助成事業運営委員会が助成を必要と認めた地域貢献活動に対する活動助成

### 3. 助成金

- ・1件当たり限度額50万円とし、助成率は事業活動費の3分の2とします。  
(継続的事業の場合は3年を限度とします)

### 7. 助成事業一覧について (事例)

年度	事業名		助成額	備考
平成30年	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	20万円	2年目
	松山市	女性と防災の会	5万円	1年目
令和1年	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	20万円	3年目
	松山市	女性と防災の会	8万円	2年目
令和6年	松山市	宮内家住宅保存活用調査	50万円	単年

### 4. 応募手続き

#### ①助成申請者は

- ・申請時に組織内に建築士会会員として継続して在籍が3年以上の者が複数参画している活動団体の代表者。
- ・建築士会の内部組織（研究会等）の代表者で上記2の助成事業を行おうとする者。

#### ②助成申請書は規定の申請書により申請してください。 (申請書はHPからダウンロードできます)

<http://www.ehime-shikai.com/other/6734.html>

### 5. 応募期間

令和8年4月1日～5月29日まで（事前問い合わせは随時受け付けます。）

※応募期間前であっても、仮受付をしますので、お申し出ください。

### 6. 助成対象事業の決定と助成金交付等について

- ・助成対象事業の趣旨に沿った事業かどうかを基準に「愛媛県建築士会地域貢献団体助成事業運営委員会」が審査します。助成額の決定は、申請書受理後60日以内に書面にて通知します。
- ・事業の実施期間は、助成額決定日から令和9年3月31日の間に実施される活動を基本とします。
- ・助成金は、交付申請者に対して、助成金交付決定通知後の助成金請求に基づき交付します。
- ・交付申請者には、活動の内容・助成金の管理・報告書の提出に責任を持っていただきます。

提出及び問合せ先：公益社団法人愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町4-1-5 建築士会館2階

TEL：089-945-6100 FAX：089-948-0061 E-mail：lee04603@nifty.ne.jp

## あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集しています。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。  
(尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承ください。)

### 「いしづち」の次号の原稿締切日

令和8年 5月号 (170号) 令和8年3月26日(木)

※1ページ写真込みで2150文字(25文字×43行×横2段)のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。

写真は1ページ当たり3枚程度まで題名を付けて添付してください。

また宜しければ投稿者の写真(免許写真程度の顔写真)を添付してください。

会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。

(尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかもしれませんので予めご了承ください。)

この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にも、建築についての対話等の輪が広がればと願っています。  
情報・広報委員会

## 読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せください。お待ちしております。

「いしづち」編集委員会(土会事務局内) 宛 FAX 089-948-0061

## 編集後記

1月に東京・港区の高輪ゲートウェイ駅に隣接した南北約1.6キロメートルに及ぶ再開発地区を訪れた。

現在は、「TAKANAWA GATEWAY CITY」が、2025年3月27日に街開きし、「THE LINKPILLAR 1」と高輪ゲートウェイ駅が全面開業。さらに、26年春には残りの棟も完成し、全体開業する。この全体開業時に開館するのが、総合文化施設「MoN Takanawa:The Museum of Narratives」だ。外装デザインアーキテクトは隈研吾建築都市設計事務所が担当。地上6階、地下3階の低層建築で、地下3階には約1200人収容のライブ・パフォーマンス空間「BOX1000」が、地下2階には開催中のプログラムや参加クリエイターに関連する書籍やグッズなどのアーカイブが並ぶ本棚「メディアシェルフ」が誕生する。

こちらは現在工事中で、26年春以降で赴くとして、今回は高輪ゲートウェイシティの核をなす「複合棟1(North・South)」を訪れてみた。

この複合棟1で一番印象的だったのが、南棟(South)で「ホテル×商業」の融合拠点。上層階には、首都圏初進出となる「JWマリオット・ホテル東京」が入居。商業フロアは「THE LINKPILLAR」と呼ばれ、テーマは「食とライフスタイルの拠点」。レストラン、バー、体験型ショップが集まり、都市生活者に新たな体験を提供していた。そして、その中でさらにLUFTBAUM(高層階)とMIMURE(低層階)に分かれる構成だった。

LUFTBAUM(ルフトバウム)は、28~29階の高層レストランフロアで、緑に包まれた空中庭園のような空間も併設され、見晴らしも良く、都内を眺めながら多彩なダイニング体験が楽しめた。ランチは思ったよりもお手頃な価格設定で、上質な料理と非日常的な空中庭園の空間が融合しており、まさに“食の新名所”となるだろう。

## 〈いしづち〉2026/3

令和8年3月発行

発行人 会長 尾藤淳一

発行所 公益社団法人 愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町四丁目1-5 愛媛県建築士会館2F

TEL(089)945-6100 FAX(089)948-0061 <http://www.ehime-shikai.com>

印刷所 アマノ印刷株式会社

情報・広報委員会・広報委員

委員長/大平 将司 副委員長/渡邊 道彦

編集委員/一之瀬 佳緒理 河合 優志 西岡 亜有美 西森 勉